

市川九女八

長谷川時雨

青空文庫

若い女が、キャツと声を立てて、バタバタと、草履ぞうりを蹴けとばして、楽屋の入口の間へ駈かけこんだが、身を縮めて壁にくっついてしていると、

「どうしたんだ、見つともねえ。」

部屋のあるじは苦にが々にがしげにいった。渋い、透とおつた声だ。

奈落の暗くら闇やみで、男に抱きつかれたといったら、も一度此処ここでも、肝きもを冷されるほど叱しかられるにきまつているから、弟子娘でしは乳房ちゅうぶさを抱かかえて、息を殺している。

「しようがねえ奴らだな。じてえ、お前たちが、ばかな真似まねをされるように、呆ぼんやりして
るからだ。」

舞台と平時ふだんとの区別もなく白く塗りたてて、芸に色気が出ないで、ただの時は、いやに色っぽい、女役者の悪いところだけ真似るのを嫌いやがっている九女八くめはちは、銀のべの煙管キセルをおいて、鏡台へむかったが、小むずかしい顔をしている渋面が鏡に写ったので、ふと、口をつぐんだ。

七十になる彼女は、中幕なかまくの所作事しよさごと「浅妻船あさつまぶね」の若い女ふんに扮ふんそうとしていたところだつた。

「お師匠さん、ごめんなすつて下さい。華紅かこうさんが、他よそのお弟子さんと間違えられたのですよ。」

「静ちゃん、その娘こに、ばかな目に逢あわないように、言いいきかせておくれよ。」

九女八は、襟えり白粉おしろいの刷毛はけを、手て伝でんいに來きてくれた、鏡かがみのなかにうつる静枝しずえにいつた。

根岸ねがしの家いへにも一緒いっしょにいる内弟子うちでしの静枝しずえは、他ほかのものものとちがって並々うつつの器量けりやうでないことを知しっているのだ、

「静ちゃん、あすこの引拔ひきちきを、今日けふは巧うまくやつておくれ。引きぬきなんざ、一度いちど覺おぼえればコツはおんなじだ。自分おれが演やるときもそうだよ。」

静枝しずえは——後あとに藤蔭流ふじかげの家いへ元もととなるだけに、身みにしみて年としをとつた師匠ししやうの舞台ぶたいの世話をせわ見みている。

一人ひとりと呼ばよばれ、女團十郎おんなだんじやうと呼ばよばれ、九代目市川團十郎くわいだいめいちがわだんじやうの、たつた一人ひとりの女弟子おんなでしで、九女八くわにやちという名なをもらつている師匠ししやうが、歌舞伎座かぶきざのような大舞台おほいぶたいを踏ふまずに、この立派たてりな芸げいを、小芝居こしばいや、素人しろうとまじりの改良文士劇けいりやうぶんしげきや、女役者おんなやくの一座いっせの中で衰おとろえさせてしまふのかと、

その人の芸が惜おしくつて、静枝は思わず涙ぐんだ。

鏡へうつる眼のなかのうるみを、見られまいとしてうつむくとたんに、九女八づきの狂言方かた、藤台助ふじだいすけが入口の暖簾のれんを頭でわけてぬつと室へやへはいつて来た。

「どうしたんだ、叱おこられてもしたのか。」

そういうのへ、九女八は審いぶかしそうに顔を向けた。静枝へいつていのではないと思ったからだつた。

「ははア、からかつたのはお前さんか。」

九女八は、若い女ものへ調からかい戲あそびたがる台助のくせを知っているので、口へは出さないが、腹の中でそう思っている。

「師匠、この次興行、浅草へ出てくれないかというのだが——」

静枝は、台助の顔を、睨にらむつもりではなかったが、そう見えるほど厳しく下から見上げた。今もいま、師匠のかけがえのない好い芸ぎを、心の中で惜あやんでいたのに、このお爺じいさんは見世みせものの中へ出すのか——と思つたからだ。

「なんだ。二人とも、妙な面つらあするんだな。」

座頭ざがしらへむかつて、仮にも、狂言方が、そんな、いけぞんざいな言葉がいえるはずはな

いのだが、台助は九女八の夫で、しかも、九女八に惚れ込んで、大問屋の旦那が、家も子も女房も捨て、小芝居の楽屋へ転がり込んだという、前身が鼯鼠筋ではあるし、今も守住さんで通っている亭主だったのだ。

「考えておきましょうよ。」

女房の九女八は、女団洲だんしゅうで通る素帳きちようめん面な、楽屋でも家庭でも、芸一方の、言葉つきは男のようだが、氣質のさっぱりした、書や画をよくした、教養のある人柄だった。

馴れてるとはいいながら、九女八の扮装は手早かった。水刷毛みずばけをすると、眉まゆは墨をチョンと打って指で引っぱる。唇くちびるの紅は、ちよいとつけて墨をさして、すツと吸っておくばかりだ。

それでもう、生々いきいきした娘の顔になっている。子供のとときから、御狂言師で叩き込んでいたので踊のおさらいのような、けばけばしい鏡台前ではなかった。筆は一本兎うさぎの足が一つという簡素さだ。お茶とかき餅もちがすきなで、それだけは、いつも傍かたわらにある。

「桂かつらがさきへ帰るからね、晩御飯に、さんま食べるって——浅漬あさづけもとつといておくれ。」
湯呑ゆのみと手鏡を持って、舞台裏まで附いてゆく静枝にいいつけた。

根岸の家は茶座敷などもあつて、庭一ぱいの鶯草が、夏のはじめには水のように這う、青い庭へ、白い小花を飛ばしていた。

そんな日の午前、紫の竜紋の袷の被衣を脱いで、茶釜のさきを二ツに割つただけの、鬘下地に結つた、面長な、下ぶくれの、品の好い彼女は、好い恰好をした、高い鼻をうつつむけて、そのころ趣味をもつた、サビタや、メシヨンや琥珀のパイプを、並べて磨いている。

養女の菊子に、台助が、意味をもつた眼づかいをして、何か小用を、甘ツたるく言いつけているのを後にきいて、軽く眉をひそめていたが、台助が外出した気配にホツとしたよ

うで、
「静枝さんは、依田先生のところへいったかい。」

「ええ、丁度、今帰りました。坂本の榮泉堂へお菓子を買いにいったら、帰りが一緒になりましたの。」

と、内弟子の華代子が、餅菓子を好い陶器の鉢へ入れて持って来ていった。

二人の内弟子のうち、華代子は他のものにはきらわれたが気に入るので、師匠の小間使いをしている。静枝には海老茶袴をはかせて玄關番をさせ、神田小川町の依田百

川——学海翁のところへ漢学をならわせにやるのだった。

「女役者だつて、学問があつて、絵が描けなければだめだよ。」

彼女も、用がなければ、サビタのパイプを弄る前には、絵筆を捻っているのだった。

けれど彼女に、守住月華げっかという雅号のような名があるのは、絵を描くためではなくつて、明治十一年ごろからはじまった、演劇改良会の流れで、演劇改良論者の仲間であつた学海が、明治廿四年浅草公園裏の吾妻座あづま（後の宮戸座）で、伊井蓉峰いじようほうをはじめ男女合同学生演劇済美館の旗上げをした時、芳町よしちようの芸妓米八よねはちには千歳米波ちとせべいと名乗らせた時分だったか、もすこし後で、川上貞奴さだやつこを援助たすけに出た時だけに、彼女にも守住の本姓に月華という名を与えたのだった。

岩井彖くめはち八といつた時分の弟子には、紀久八きくはちたちがあるが、月華になつてからは、かつらとか、名古屋の源氏節から来た女にも、華紅かこうとか、華代子とかいう名をつけた。新しい弟子の静枝も、学海居士こしじが名づけたのだった。

彼女は、好物な甘いもので、苦いお茶を飲んで、閑かな日しずが、気持ちよげだった。

「こんやは一ツ、静ちゃんしずに『舌出し三番』でも教えるか。」

といつたが、古い日のことを思出したのであろう、お前の踊の師匠だった、おとねさんは、

しどいよ、と言った。

おとねさんという名をきくと、静枝は故郷の新潟にいがたの花柳界さかりばを思いだした。静枝の踊の師匠は、市川の名取りで、九代目団十郎の妹のお成さんなるという浅草聖天しやうてんちやう町にいた人の弟子だった。

「そういえば、お師匠さんが新潟へお出いでになった時、あたしはまだ小っぽけでした。お揃そろいの浴衣ゆかたを着て、川蒸気船の着く、万代橋ばんだいの川つぱたまで、お迎えに出ていましたっけ。」

「うん、そんなこともあったっけね。」

九女八は凝じつと、庭の鷺草を見つめた。

新潟の花街さかりばで名うての、庄内屋の養女だった静枝までが、船着き場へ迎いに並んだほど、九女八の乗り込みは人気があったのだが、それも、会津屋あいつやおあいといった芸妓が、市川流の踊りの師匠で、市川とねと名のついていたから、同門の誼よしみで、華々しく迎えたのだった。

土地の顔役で、江戸生れのお爺さん、江戸鮎えどすしの孫娘に生れた静枝は、直江津なおえつまでしか汽車のなかつた時分の、偉い女役者が乗込んで来た日の幼かつた自分の事も、あの、日本海

の荒海から流れ込んでくる、万代橋の下の水の色とともに目にうかべ、思い出していた。

「出しものは道成寺だ。勧進帳を出したのは、興行師らから、断わりきれない頼みだったんだ。そのこたあ、おとねだつて知つてたのに。」

それがもつて、市川升之丞の名を取り上げられ、九代目団十郎から破門され、また岩井糸八の名にかへつて、暫く蟄伏しなければならなかった、嫌な思出と、若かつた日のことなども、それからそれへと、九女八も思いうかべている。

「お師匠さんは、新潟へ入らした時から、九女八だつたとばかり思つてました。あたし、ちいさい時でしたから。」

「市川升之丞さ。」

九女八は、タバコの脂やにの流れた筋が、あめ餡色すきとおに透通すきとおるようになった、琥珀こはくのパイプを透すかして眺めて、

「あたしは、一番はじめの、踊の名取りが阪東桂八ばんとうけいはちさ。それから、女役者になつて岩井糸八、それから市川升之丞、守住月華、市川九女八さ。」

随分とりかえたものさねと、自分のことではないような、淡淡としたふうにいつて、
「だが、師匠運は、ばかに好いのさ。阪東三津江みつえというお狂言師は、永木三津五郎えいきという

名人の弟子で、まあ、ちよつとない名人だよ、高名なものさ。岩井半四郎は、大杜若と
呼ばれた人の孫だったかで、好い容貌きりようの女形おやまだった。けれど、なんといったつて、市川
宗家きじほどの役者の、門弟でしになったなあ、あたしの名誉さ。」

ほんとに、団十郎の芸には心酔している言いぶりだった。

「好い先生といえ、ねえ、お師匠さん、依田先生が、和歌も学んだ方が好いから、竹
柏園くえんに通つたらどうだと仰しやつて、入門のことを話しといてあげると仰しやいました
。」

「そりゃあ豪儀だな。」

ふくみ笑いを、ほんとに笑つてしまつて、

「学問は上達しても、踊が、あれじゃあなつてねえな。お前めえたちののは、踊つてるんじやな
くて、畳なを嘗めてるんだ。」

機嫌の好い皮肉だった。

「あつしや全体、神田の豊島町としまちようで生れたんだけれど、牛込うしごめの赤城下あかぎしたに住んでたのさ。
お父さんはお組役人——幕末あのころの小役人こやくにんなんざ貧乏だよ。赤城神社あかぎさまの境内なかに阪東三江八
つてお踊の師匠さんがあつてね、赤城さまへ遊びにゆくと、三江八さんのところの格子こうしに

つかまつて覗いてばかりいたのさ。」

呼びこまれて踊ってみると、見覚えで踊れた。それから親には内密で教えてくれたのだが、お母さんが肩を入れだして、どうかお父さんに許されるようにと、何かの祝事いわいごとのあつた時、父親やその仲間のいるところで本式に踊らして見せたので、その後、直に父親を歿なくなしてから、十三、四から踊りの手ほどきをして、母親と二人で暮していったのだがと、めずらしく身の上ばなしをしだした。

「お文さんという、常磐津とぎわづの地で、地弾じびきをしてくれる人が、あたしを可愛がつてね。小石川伝通院でんつういんにいた、高名な三津江師匠のところへ連れてつてくれたのだが芸こわは怖い。」と彼女はふとい息を吐いた。

「それまで、あたしが踊つてたのは、手ふりき、踊りなんかじゃないのさ。それから、本当の踊りをしこまれた。」

「そういえばお師匠さん、高橋お伝をおやんなさつたことがあるでしょ。」

「ああ、たしか明治十七年ごろだった。」

「いいえ、もつとあとで、見た人が、お伝になった、お師匠しよさんの扮装おつくりを見て、お師匠しよさんの若い時分——年増としまぶりを見た気がしたつて、言つてました。」

「あツしやあ、あんなじやなかつたよ。」

苦りきつたかげが唇をかすめたが、湯呑の銀の蓋をとつて、お茶を飲んでしまった。

「もつとも、あの着附は、あの時分の年増の気のきいた好みさ。だが、あツしばかりじゃない。全体、あの『綴合於伝仮名書』というのは、いつだったかねえ、お伝の所刑は九年ごろだったから——十一、二年ごろに菊五郎が河竹黙阿弥さんに書下してもらつて、そうそう裁判所のところが大詰に出るので、大道具長谷川勘兵衛さんと、裁判所まで行つたんだよ。なんでも、その時の話に、おでんという女は伝法な毒婦じやなくつて、野暮な、克明な女だから、そういうふうに演るつていったことだが——そうかも知れないね。お伝は、上州沼田というところの御家老の落し種で、利根の方の農家のところで生れたのだそうだから。」

「でも、お師匠さん、すこし根下りの大丸鬚に、水色鹿の子の手柄で、鼈甲の櫛が眼に残っていますつて——黒っぽい透綾の着物に、腹合せの帯、襟裏も水浅黄でしたつてね。そうだ、帯上げもおなじ色だったので、大粒な、珊瑚珠の金簪が眼についたつて。」

朝、目が覚めて、蚊帳から出た時に、薄暗い庭の植込みに、大輪な紫陽花の花を見出す

と、その時の九女八のおでんが浮びあがるといったことや、それは、浅草蔵前の宿で、病夫浪之助を殺して表へ出た時の着附だったか、捕まる時のだか、そんなことはもう、臙げになってしまっているといつてたのを、はなした。

「お師匠さんは、あんな役、厭いなんですよ。」

「まあね、いつて見れば、あたしは、女団洲と呼ばれたくらいだし、自分でも、団十郎のすることの方が好きだから——わかりもしないくせに、高尚ぶつてるといわれたりしたけれど、もともとお狂言師は、生世話物をやらなかったからねえ。それが癖になって、新世話物に行けなかったのかも知れない。」

——けど、おかしいわ、ちつと——

そうそう、新入門の、とし子さんならば、そうハキハキと問えるかもしれない、と考えながら、静枝は、

「でも——それでも、お師匠さんは、もつと新らしい、書生芝居にもお出なすつたのでしよう。」

九女八は、理窟を言う、静枝のみずみずした丸い顔を見て、

「あたしは、こんな、小さな柄だけれど、毛剃だの、熊谷の陣屋だの、あんなものが好

き。山姥やまうばなんでも団十郎のいきで、彫刻ほりもののように刻りあげてゆきたい方だが、野田安のだやすさんて、松駒連まつこまれんの幹事さんで芝居に夢中人が、川上さんのお貞さんを助けて出ると、なんといつてもきかないのでね、芸は修業だから出もしたし、それに文士方の新史劇の方は、——史劇は団十郎ししゅうも気を入れていたのだもの。」

彼女はふと気を代えていった。

「お前さんも、あんな、抱えの芸妓衆げいしやしゅうや、娼妓おいらんが、何十人いるうちの、踊舞台だつて、あんな大きなのがある、庄内屋さんの家督娘あとりに貰もらわれて、よくよく芸が好きなればこそ、家を飛出してあたしんとこなんぞの、内弟子になつてるんだから、よく覚えてくれなけりやあ、しようがない。」

それら、お談議になつたと、静枝がかしこまつて、閉口へいこうしかけているところへ、

「今日きょう、お髪くし、お染めになりますか。」

と、風呂の支度をする女中がききに來たので、静枝は、やれ助かつたとホツとした。

——降り出した雨。

ト、舞台は車軸を流すような豪雨となり、折から山中の夕暗、だんまり模様よろしくあつて引っぱり、九女八役は、花道七三に菰をかぶつて丸くなる。それぞれの見得、幕引くと、九女八起上り合方よろしくあつて、揚幕へ入る——

蚊のなくように、何時、どこで、なんの役でかの、狂言本読みの、立作者が読んできかす、ある役の引っこみの個処が、頭の奥の方で、その当時聴いた声のまままで繰返してきこえる。それについて、その役の、引つ込みの足どりまで、九女八は眼の前の、庭の雨を眺めながら、考えともなく考えているのだった。

——はて、この役は、女だったかな、男だったかな——

ながい舞台生活は、華やかなようでも、演る役は、普通生活とおなじで、そうそう他種類はない。自分についた持役は大概きまつていて、柄にない役はもつてこないのだが、どうしたことか、今考えている役がなんだか、九女八には思いだせない、それに、なんでも思ひ出さなければならぬことでもない。と、そう思うかげに、ながい間役者をしたが、とうとう、団十郎と一つ舞台に並べなかつたという、何時も悲しむさびしさが、心の奥を去来していた。

「あたしは、考えかたが、間違つてた。」

九女八は、鷺草の、白い花がポツポツと咲き残るのへ降る雨が、庭面にわもを、真つ青に見せて、もやもやと、青い影が漂うようなのに、凝ぎっと心をひかれながら、呟つぶやいた。

「なにがよ。」

芸者や、役者の配り手拭てぬぐいの、柄の好いのばかりで拵こしらえた手拭浴衣を着て、八反はつたんの平ひらぐけを前でしめて、寝ころんだまま、耳にかんぜよりを突ツこんでいた台助が、腑ふにおちない顔をした。

「なんてって——」

九女八は、まだ、素足すあしの引っこみの足どりの幻影かげを、庭の、雨足のなかに追いながら、「成田屋ししやうのうちの庭は、あすこらあたりに、大きな、低い、捨石があつたつけが——」
と、自分でも思いがけない、話の本筋とは違うことを、ふいと、口に浮び出したままいった。

「お歿なくなんなすつてからも、居間おへやの前の庭は、当時そのままだから——」

九女八は、一木一石といったふうの団十郎ししやうの家の庭に、鷺草が、今日も、この雨に、しつとりと濡ぬれているだろう風情ふせいを、思うのだった。

台助は、なんとなく顔をあげて、庭もせから、部屋の中を見廻した。其処には、自分の趣味なんぞ半欠けらもなかった。九女八の好みであり、それは、彼女が私淑した成田屋好みである、書画、骨董、それら、人格に深みを添えるたしなみが、女役者の住居とは思わせなかった。

「高田先生（早苗）は、あたしを女のまままで、女役にして、団十郎の相手を演らせてくださろうとなさったのだつたと、はじめて——始めて、わたしは気がついた。」

九女八の唇は細かくふるえている。ちらりと、それを、台助は見ないのではないが、
「今更おそい——か。おくれたりだなあ。」

同情しながら、わざとというのかもしれないが、おひやらかしたふうにもとれた。が、九女八はそれにはかまわず、

「師匠の芸の神髓を掴んだ、と思つたのは真似だけだったのか——師匠は、女団洲なんて、嫌だつたらうなあ。」

「だつてお前、団十郎だつて、高田さんにそういつたつてじゃねえか、九女八が男だと、相手にして好い役者だつて——だから、お前が、女に生れたつてことが、師匠といっしょに演れなかつたということなんで、生れかわらなきや、頭から駄目だったのだ。」

「そうじやありませんよ、静枝やとし子さんの考えを見ても、川上さんや、依田先生たちのことを思い出しても、あたしは、毛剃や、弁慶が巧かったのがいけなかった。」

「高田先生は、そのつもりだったのかも知れないが、宗家はそうじやなからうぜ。」

「あたしを女優——女形として、相手にはしなかつたらうとですか？」

「そうじやないか、彼女は立派な役者だ。男だったら、俺の相手だがと、だから、高田先生に言ったんだ。」

「いいえ。」

九女八はしみじみとして、

「あたしがねえ、小芝居ばかりに出ていたので、どうかして、あれを止めねえものかと仰しやつてたそうだから——」

緞帳 芝居——小芝居へ落ちていた役者は、大劇場出身者で、名題役者でも、帰り

新参となつて三階の相中部屋に入れこみで鏡台を並べさせ、相中並の役を与え、慥か三場処ほど謹慎しなければ、もとの位置にはもどさない仕来りがある、階級的な差別の厳しいのが芝居道だった。

九女八は、下谷佐竹ツ原の浄るり座や、麻布森元の開盛座を廻り、四谷の桐座や、

本所の寿座が出来て、格の好い中劇場へ出るようになるかと思うと、また、神田の三崎町の三崎座に女役者の座頭になってしまったりする。その上に、勧進帳のことで破門されたりして、九代目に芸を認めてもらえながら、引上げてもらう機運をはずしたのだと、もう、どうにもしようのない侘しさを、噛んでいる。

「二銭団洲だって、歌舞伎座を踏んだのにな。」

台助は、はずみで、そんなことを言ってしまったから、しまったと思った。九女八が苦い顔をしたからだ。二銭団洲とは、下谷の柳盛座で、二銭の木戸銭で見せていた、阪東又三郎が、めっかちではあるが団十郎を真似て、一生の望みが叶って、歌舞伎座の夏休みのあきを借りて乗り出したことがあったのを、いかもの食いの見物が、つねづね聞いた二銭団洲を見にいった。出しものは「酒井の太鼓」だったが、あとで座付き役者から物議が起ったことがあったりした、九女八にはいやな、ききたくないことなのだ。

「仕方がないよ、あたしは、はじめっから小芝居へ出てたものね。女役者なんて、あたしたちから出来たのだから。」

九女八は、老ても色の白い、柔らかい足を出している、台助の足の小指に触って見た。台助は、艶々とした、額から抜け上っている頭の禿かたも、柔和な、品の悪くない、

いかにも以前もとは大問屋の旦那であつたというふうな、鷹揚おうようさと、のんびりした耳朶みみたぶとを持つている、どこか好色とじよりそうな老爺とじよりだつた。

「大阪せんの千日前せんへ芦辺俱樂部あしべくらぶというのが出来るそうで、師匠しせうが出てくれるならば、月額千円は出すというのだだそうだ。」

九女八は、考え、考え、台助の小指をいじりながら、

「見世物小屋ではないでしょうかねえ。でも、お金が溜たまれば、も一度、何か、やつて見る事も出来るでしょうから——」

「一年十二ヶ月、頭から約束しようというのだが——痛いたえよう。」

と、台助は足をひっこめた。

「そりやそうと、繁しげの井いを久しくやらないね。」

「染分そめわけ手綱たづなですか——繁しげの井いをすると、思おもい出すものね。」

弟子でしぶん分ぶんだつた沢村紀久八さわむらきくはちが、お乳ちの人ひと繁しげの井いをしていて、じねんじよの三吉との子別こべつれに、あんまりよく似ている身の上につまされ、役と自分とのわけめがつかなくなつて、舞台で気の狂つてしまったことを思おもい出すからだつた。

しかも、その、女役者紀久八は小説にもなり狂言にもなつてゐる。佐藤紅緑さとうこうろく氏の「俠き

艶録ようえんろく」の力枝りきえという女役者は、舞台で気の狂った紀久八がモデルであつた。小栗風葉おぐりふうよだつたかのに、「鬢下地かつらしたじ」というのがある。

「紀久八は舞台で気狂いになつたが——あたしは舞台で死ねれば本望だ。なあに、小芝居だつて見世物小屋だつて、お客さまはみんな眼玉をもつてらっしゃる。どんな人が見てくださつてるかわかりやしない。」

「じゃあ、まあ、とにかく、大阪の方の話は、出来そうな工合に、返事をしといてもいいね。」

——これは、もちつと後あとのことで、九女八はこの大阪から帰つてから後、大正二年の七月に、浅草公園の活動劇場しほいみくに座で、一日三回興業に、山姥やまうばや保名やすなを踊り、楽屋で衣裳しやうを脱だごうとしかけて卒倒し、そのままになつてしまつたのだつた。大阪で溜ためて来た金は、九女八が、何か計画して考えていたことには用いられず、終しゆうえん焉の用意となつてしまつたのだが、台助は、そんな予感がしたのかどうか、ふいと、仕かけていたその談話を打ち切つて、

「俺は、ちよいとその事で、出かけてくる。」
と着更きがえをしかけたところへ、静枝が名刺を読みながら来て、

「お師匠さんの芸談を聴きに来た、演芸の方の記者らしいのですよ。談話はなしといてくださった方が好いと思えますから、お逢いになつてくださいな。」

と、婉えんきよく曲まがに、この名人の真相を残させたい、弟子の心やりですすめた。

「じゃあ、茶室へでもお通ししといておくなさい。」

と九女八が言っているうちに、台助は玄関で、来訪者と摺すれちがいに、傘をさして、門の外へ出ていった。

「おや、お出かけですか。」

と、台助に声をかけたのは、通りかかった芝居道に通じている、芸人の間を歩き廻る顔の広い男だった。その男は、九女八の家の門口うちぐちで、顔かお馴なじ染しみの台助に逢うと、いま聞いてきたばかりの、煙けむの出るような噂うわさがしたくてたまらなくなつたように、

「そういえば、御存じだろうが、あつしやあ今聞いたばかりのホヤホヤなんだ。話は古いことだが、お宅の師匠は、以前もと、堀越ほりこしから、なんとという名をおもらいなすつてた。」

「升之丞ですよ。」

「そうだつてねえ、守住さん。それについちやあ、面白い話があるんだ、何時いつ、九女八とおんななすつた。」

「さあ、たしか、しんとみちよう新富町の市川左団次さんが、わび謝に連れてつてくださって、きざん帰参が叶つたんですが——ありやあ、廿七、八年ごろだったかな。」

「そこなんだよ守住さん、御勘気に触れて破門された時に、師範状を取上げに行つたのは、だんしゅうろうえんし談州楼燕枝はなしか（落語家）だったつてね。それがね、そうけ宗家へおさめねえうちに、その師範状をなくしちゃつたんだとき、すっかり忘れてると、急に帰参が叶つたので、やつこ奴さん弱つたのなんのつて、でね、九代目の女弟子で、もとが岩井糸八だから、糸の字を九くの宇と女めの字にした方がいいつて、こじつけちやつたんだそうだが——こっけい滑稽さね。」

「へえ、そんなことがありますかねえ。」

台助は、傘を打つ雨を見上げた。そこ上層は晴れているのか、うす鼠色ねずみの雲からこぼれてくる雨は白く光っている。

「ねえ、お前さん、この雨の工合は、九女八うちの芸のような——地震加藤とか光秀みつひでをやる時の——底光りがしてるじゃねえか。きのしたしやうこう木下尚江さんという先生は、日本にすぐれた女性おそ性が三人ある、畏れ多いが神功皇后様じんぐうを始め奉り、紫式部、それから九女八だと仰しやつたそうだが——」

と、たいして親しくもない男へも言いかけた気がした。

家うちでは九女八が、訪問者へ、こんなふうな懐古談をしているときだった。

「母が再縁いたしますと、養父が自儘じまな町住居ずまいをしているような、道楽者の武家ですて、私は十六の年、小石川水道町で踊の師匠をはじめました。ええ、私がごく小さい時分に、両国におでこ芝居がございましたのと、妾女うねめが原はらに小三こさんという三人姉妹の芝居があり、も一つ、鈴之助というのがあっただけで、これらは葭簀よしずば張りの小屋でございますから、まあ私どもが、芝居小屋でやりました女役者のはじめのようなもので——初開場？ 薩摩座さつまざの出勤には、政岡と仁木。その次が由良之助でございました。」

語りさして、彼女もふと、白い雨のこぼれてくる、空を見上げていた。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「春帯記」岡倉書房

1937（昭和12）年10月発行

初出：「東京朝日新聞」

1937（昭和12）年6月23～29日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

市川九女八

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>